

列王記下5章1－3節、7－15節C
テモテへの手紙二 2章8－15節
ルカによる福音書17章11－19節

新しい聖書日課になって、旧約が「ルツ記」から、「列王記下」のお話になりました。内容は、アラム（シリア）の將軍ナアマンがイスラエルの預言者エリシャによって、既定の病をいやされるお話です。福音書のお話は、今までと同じ、イエス様が10人の既定の病の人々を癒すお話です。旧約日課と福音書は、既定の病の癒しの出来事から、何を学ぶかを主題としています。

「既定の病」という訳語は、「聖書協会共同訳」から用いられている言葉です。それ以前は皮膚病に関する言葉や具体的な病名が用いられていました。「既定の病」という表現は、その言葉によって誰かを傷つけることがないようにと考慮した訳語です。その意味するところは、律法によって定められた病気であり、その病を患った場合、その定めに従って、祭司が完治したと認めるまで、区別や隔離など、何らかの著しい不利益を受ける病であるということです。

さて、旧約日課のアラム（シリア）の將軍ナアマンと彼が預言者エリシャによって清められた出来事は、ルカ福音書4章27節のイエス様の言葉にも登場します。その意味では、イエス様の時代でも、『聖書』の中で有名なお話であったといえます。お話の概略は、イスラエルを打ち負かせたアラムの將軍が、秘密にしていたが実は既定の病を患っていた。そして、捕虜にしたイスラエルの少女の言葉から、サマリア（イスラエル）の預言者なら清められるといわれ、半信半疑で部下とエリシャに会いに行くのですが、エリシャの指示はいたって簡単で、ヨルダン川で七回体を洗えというものであった。ナアマンは、何も宗教的所作をしないのか、水なら自分の国にある川「**ダマスコの川であるアバナやパルパル**」の方が良質ではないかと怒ってしまうのですが、部下の助言を受けて言う通りにすると、清くなり、「**イスラエルのほか、全地のどこにも神はおられないということがよく分かりました**」と主なる神様に立ち返るという流れです。

このナアマンのお話が見せる事柄は、『聖書』の神様は、イスラエルの神様であるが、天地を創造されたすべてを治める方であり、その救いはイスラエルだけに限定されるのではなく、立ち返るものすべてに及ぶ、外国人・異邦人にも及ぶというものです。これは『聖書』の根底にある主題なのですが、様々な面で受け止めることに課題がある事柄です。

一つには、『聖書』という書物とそれにかかわる事柄は、そもそもイスラエルという集団の文化であり、それ以外の文化や歴史を歩んできた人々とは基本的には無関係であるということです。イスラエルと敵対した、隣国であるアラムの將軍であるナアマンの反応がそうであるように、『聖書』の主なる神様は、その神によって選ばれたイスラエルの人々にとっても、そのイスラエルを外的に見る人々にとっても、イスラエルの固有の神として見られるのです。そして、それゆえに、きわめて地理的にも歴史的にも小さい集団の神的存在が、すべてを

治める方であるとはなかなか位置付けられないのです。

次に、たとえそのように『聖書』の主なる神様の存在に気付いた人々は、他文化に対して優先的にあるいは排他的に救われるか否かということが課題となります。これは、『聖書』自身の中でも神学的に意見が分かれます。また、今日の教会でも様々な神学的な課題を突きつけます。教会の語る救いとは何かという事柄に関わるからです。

さらに課題となるのは、『聖書』の主なる神様がすべてを治める方であると信じる時、それ以外のいわゆるもろもろの神々とそれに伴う文化をどうとうらえるかということです。現代の教会は、他宗教やそれに基づく文化を破壊するような行為はほとんどないと思いますが、教会の歴史ではそのような行為がおこなわれることがありました。現在でも、その課題が完全に神学的に解決しているわけではありません。教会自体も、エキュメニカルという視点では、まだ一致していません。

本日のルカ福音書は、イエス様を通して、『聖書』が示す神様が、すべてを治める方であり、その方に立ち返るならば、イスラエルに限らず救いの出来事に与る、具体的な事柄として、イエス様によって既定の病を清められるような奇跡に与ることを示しています。ただし、救いの完成という意味では、イエス様が10人の中で唯一戻って来たサマリア人に、「**立ち上がって、行きなさい。あなたの信仰があなたを救った**」(ルカ 17:19)と語られた通り、イエス様を通して主なる神様に信仰を告白することが大切であり、それがまことに立ち返ることであると結論付けているといえます。

『聖書』は、統一した神学的主張がある書物なのか、ただ多様な神学的主張がある文書が集められた書物なのか、常に問われ、また意見が分かれます。その答えは、『聖書』に何を求めるかという解釈者自体の前提によって分かれてしまうともいえるのですが、わたしは、『聖書』の主なる神様は、すべてを治める方である、それは時間も空間もすべてを治める方であるということであり、意図的に立ち返る人はもちろんのこと、人間的理解ではそうではなかった人であっても、しっかりと見守って救ってくださる方であると信じています。そのような神様がおられることを語るのが教会である、それが教理的に正しい事柄であるのかは、論争になるような事柄です。しかし、そのように信じるからこそ、教会から救いが広がり、今世界中で起きている悲劇に解決の糸口が見つかるのだと思います。

昨日の土曜日、神田キリスト教会で、北関東教区と東京教区合同の教役者会がありました。9月15日の合同礼拝の反省などのほか、分科会があり、合同してよくなる点、合同によって課題となる点、合同に関係なく課題と思われる点について話し合いました。同じ日本聖公会の教区同士でも、歩みをとものにしようとするとき、様々な課題があることが、改めて明らかになりました。まして、神様の存在が異なる文化同士が共に歩もうとした場合、本当に大変なのだろうと思います。しかし、わたしたちはすべてを造られた主なる神様を信じている、だからこそ、地上での違いを超えて歩むことができる、そのことを信じて歩んでいきたいと思っています。